

入学式 式辞

新入生の皆さん、入学おめでとう。

早春の緑のシャワーを浴びながら、バス停から学内の通路を歩いていくと、左手に白く咲くユキヤナギ、右手に黄色く咲き乱れるレンギョウ、そしてちまたで咲いているサクラのソメイヨシノに比べると華やかさはないが日本の野生の桜の代表ともいえるヤマザクラ、そして「ホーホケキョ」の鳴き声。「春告げ鳥」と呼ばれ、四月から七月までさえずるウグイス。ほどなく正面入り口、そしてオープンテラスのある緑に囲まれたカフェテリア、フランスのルーヴル美術館を思わせるガラス製のピラミッドのエントランスから地下へと入るとここ芙蓉館ホール。斬新なデザインの建物と緑あふれる自然豊かなキャンパスが広がっています。

本日は、本学の松井後援会長、高橋同窓会長、学校法人山村学園より岡理事長、山口理事、藤野理事、の皆様にご臨席をいただいております。

入学にあたって「個性」についてお話をいたします。

大正時代末期から昭和の初期にかけて活躍した日本の童謡詩人で、わずか二十六歳でこの世を去った金子みすゞの詩を紹介します。

「わたしと小鳥とすずと」

わたしが両手をひろげても、お空はちつともとべないが、とべる小鳥はわたしのように、地べたをはやくは走れない。わたしがからだをゆすつても、きれいな音はでないけど、あの鳴るすずはわたしのように、たくさんのうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、みんなちがつて、みんないい。

モーリス・メーテルリンクの「青い鳥」、これは一昨年の本学クリスマス会で上演された劇です。ミチルという名の少女と、兄のチルチルが幸せを探す旅に出る。彼らは幸せの青い鳥はどこか別のところにいるのだろうと考えている。どこにも見つけることができず、がっかりして家に帰ると幸せの青い鳥は、最初からずっと彼らの家にいたのだ。・・・広い世界を旅して、自分と他者を比べた後だからこそ、彼らは自分自身の実際の性質に気付くことができた。幸せになるためには、自分自身を受け入れる必要があるということです。

また、もう解散してしまいましたが、スマップの「世界に一つだけの花」という曲があります。平成時

代の好きな歌・曲の世論調査では二位に大差をつけてこの曲が一位を占めました。ということは全世代に浸透し、国民歌と言えると思います。「小さい花や大きな花 一つとして同じものはないから NO.1にならなくてもいい もともと特別なオンリーワン」・・・

ある有名な和菓子屋の当主である山口富蔵は、花をかたどった菓子がたくさんあるが、それらはどれも少しずつ色、形が違うように作られている。それは職人の技術に問題があつて、同じ形になるように作れないではありません。自然界にはまったく同じ花は二つとないからという理由で、職人はあえて形を一つずつ変えているのです。人間を含め、自然の生き物はみな違う。「卵性双生児でさえも、異なつた個性に育っていきます」。

それぞれが、べつべつで、でもそれに優劣はないことを、それぞれが素晴らしいのだということを表現しています。

さて、保護者の皆様に一言ご挨拶を申し上げます。入学、本当におめでとうございます。

大学生といつてもまだ大多数が十八歳、山村短大とご家庭で、手を取り合い、健やかな成長に力を注いで、見守っていただくことをお願いしたいと思います。

新入生の皆さん、「さいたま景観賞」を受賞した、緑あふれるこのキャンパスを愛し、入学して良かったと思える学園生活を、先輩と一緒に創ってくれること、そして**本短大の校歌**にも歌われている「友よ やまむら」にあるように、**人生にとってかけがえのない友**をつくってください。

皆さんは、間もなく公表される新しい元号の最初の学生となります。

本学の自然豊かな「森の学園」での二年間で**感性を磨き、保育の心を十分に育んでいく中で、光り輝く自分を発見していく**ことを期待し、式辞といたします。

平成三十一年四月一日

学校法人 山村学園短期大学 学長 野口一夫